

給食で余ったりんごが伝えた事

埼玉県川越市立新宿小学校 六年 荻原 光希

私の身の回りにはいつも、くだものがあつた。朝食時に食べたり、おやつとして食べたり…。色々な場面で食べていたので、私にとってくだものは「当たり前」だった。

小学五年生の時、本を読んで、りんご農家さんの苦勞を知つた。台風と戦いながらも、おいしいりんごを届けようと努力していた。そんな、農家さんの苦勞があつて私達のもとに届くくだもの。しかし、給食ではみんな食べず、たくさんのりんごが余つていた。農家さんの努力があり、私達は食べることができているのに、こんなに残すなんて…。農家さんが気の毒でならない。なぜ、みんなはくだものを食べないのだろう。私は、2つの理由を考えた。1つ目が、ふだんからあまり食べていないということだ。くだものは高いし、肉やご飯、野菜とちがひ、必須ではないので、あまり食べない人も多いのかもしれない。2つ目が、何らかの苦手意識を持っている、ということだ。汁で手がよごれるのがいや、とか、すっぱくて苦手、など、人によって苦手意識を持つポイントはちがうだろう。

みんなにくだものを食べてもらうには、すでにみんなが持つ、苦手意識を無くすことが必要となつてくるだろう。そこで、私が考えたのが、「サラダやパン、ケーキなど、料理の中に入れる」ことだ。特に、今回私がこれを考えるきっかけとなつた、りんごは、色々な料理に入れられるので、使いやすい。他の食材とくだものが混ざること、苦手意識もうすれるし、身近に感じてもらう事にもつながるだろう。これを、給食で取り入れたら、さらに効果も高まるのではないだろうか。

物価の高騰や気候の変化…。くだものをとりまく課題は多い。しかし、私は、そんな中でも多くの人にくだものを食べてほしい。くだものをみんなで食べることは日常にうるおいを与え、よりよい未来に導くだろう。